

【『琅』四十六号・あとがき】

私は、自他共に認める運動音痴である。

学生時代、友人から野球チームに誘われたとき、「運動神経が鈍いから」と遠慮すると、「鈍いというのは多少なりともある人の話で、君の場合は、ないんだよ・・・」との返事だった。多少謙遜したつもりだったが、周囲の見方は違っていたようだ。確かに、スキーもテニスも一時夢中にはなったが、たいして上達はしなかった。そういう私がスポーツについて何か言っても、的外れになるであろうことは承知の上である。

この一年、ドジャースの大谷選手には楽しませてもらった。つい先日、彼の所属チームの優勝でシーズンが終わったが、気になるのは、地区やリーグでの優勝の度に、飲み物をかけ合うシーンを見せられることである（我が国でもやっているようだ）。嬉しいからと言って、飲み物をかけ合うという習慣が、私には理解出来ない。昔から、ある種の儀式の中で酒を振りかけることは行われてはきているが、ゴータルをにかけて頭からボシヤボシヤというのは、見ていて気持ちの良いものではない。何百歩か譲って、一年間戦ってきた選手同士が、そのようにして内輪で喜びを分かち合うというなら仕方ないと思うが、ビニールを被って取材するという報道姿勢に異を唱える放送関係者はいないのだろうか。ファンも一緒に喜びを分かち合いたいと思っているだろうからというのが理由と思うが、そういうことに不快感を抱くファンもいるのである。

今年開催されたパリ五輪の柔道で、非常に見苦しい光景を目にした。金メダルを期待されていた（おそらく、本人も取れると思っていた）女子選手が、早々と敗退したので、畳を降りた同選手が、会場で響き渡るような声で大泣きを始めたのである。観客も驚いたろうし、一番ビックリしたのは、彼女を破った対戦相手ではなかったらうか。

負けて泣くのがいけないと言うのではない。苦難の末にようやく立った晴れの舞台で、早々と敗退することが辛いだろうことは、運動音痴の私でも分からなくはない。しかし、この選手の大泣きは、私には「こんな段階で負けるはずはなかった」「こんな弱い相手に負けるはずはないのに」と言っているように聞こえてならなかった。つまり、相手選手に対するリスクペクトが全く見られないと思ったのである。相手をリスクペクト出さずして自分の心をコントロール出来なければ、その人の試合は人を感動させないのではない。問題が、そういうことを彼女に忠告した競技関係者やマスコミがいたのかという点である。

五輪を見ていて、もう一つ気になることがあった。五輪に限らず、陸上競技では必ずと言っていいほど見られる光景がある。なぜ、ある種の競技選手は、演技に先立ち、観客に拍手を強要するのであろう。今や、競技場での了解事項になっているようだが、私には気持ちが悪い。拍手を求める方も、それを送る方も、そうすることで一体感が生まれるのだが、それでいいではないかということなのかも。十年ほど前、幼稚園に通っていた孫が、遊んでいる途中であるポーズをとったままピタッと動きを止めてしまうことがあった。どうしたのかと聞くと、「○○ちゃん、頑張ってたって言って!」と言う返事が返って来た。

(茂治)

〈次号原稿締め切り日〉 二〇二五年三月末日

『琅』四十六号 二〇二四年十一月 発行
編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」・ Ⅷ (〇四二一七七三一五九二七)